

8) 平成26年に特に注意する病害虫

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断G

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から平成26年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 平成25年の気象経過と病害虫の発生状況

冬期(12～2月)は、冬型の気圧配置となる日が多く、12月と1月を中心に、強い寒気の影響を断続的に受けたため、平均気温は平年より低くなった。全般に低温傾向であったことから、降雪量に対して積雪が多かった。根雪期間も平年より長くなったが、秋まき小麦の雪腐病の発生量は全道的に平年並であった。水稻の移植時期である5月中旬が低温に経過したため深水管理となり、イネミギワバエの発生がやや多くなった。

6月以降の夏期間は高温少雨となったが、7月下旬から太平洋側は降雨が多くなった。ばれいしょの疫病は、高温少雨に推移したことから発生量は平年より少なくなったが、7月下旬から降雨があった太平洋側では平年並の発生となった地域もあった。てんさいの褐斑病は前年までの多発により伝染源が多かったと考えられるが、初発は平年並でその後の防除により進展は抑制された。虫害では、大豆のマメシンクイガは平成19年以降多発が続いており、25年の発生も多かったことに加え、少雨の影響により出芽がばらつき、防除開始の目安となる着莢が不揃いとなったため、防除適期の把握が難しく被害が発生した。大豆および小豆の食葉性鱗翅目幼虫は、6～7月の高温少雨経過により、幼虫の食害活動に好適であった。てんさいのヨトウガは、6月以降の高温経過により幼虫の生存率が高まったため第1世代、第2世代とも発生量がやや多くなった。

主要病害虫のうち、多発～やや多発となった病害虫を表1にまとめた。なお、これら以外に発生

目立ったものとして、病害では秋まき小麦の縞萎縮病、なまぐさ黒穂病、てんさいの西部萎黄病、害虫では、たまねぎおよびねぎのネギハモグリバエ、だいこんおよびブロッコリーのヒメダイコンバエ、各種作物のヨトウガがあげられる。

表1 平成25年度にやや多発～多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	ばか苗病・紋枯病・イネミギワバエ
秋まき小麦	赤さび病
春まき小麦	ムギキモグリバエ
大豆	マメシンクイガ・食葉性鱗翅目幼虫
小豆	食葉性鱗翅目幼虫
ばれいしょ	黒あし病
てんさい	ヨトウガ(第1回、第2回)
にんじん	黒葉枯病
だいこん	軟腐病
はくさい	軟腐病
りんご	ハダニ類

3. 平成26年に特に注意を要する病害虫

(1) 秋まき小麦の赤さび病

平成25年は、道内各地で秋まき小麦において赤さび病の発生が認められ、現況調査によると、被害面積率は道内全体で9.3%(平年0.8%)と近年にない多発生となった。平成25年は5月下旬から6月上旬にかけて高温少雨傾向で、本病の発生に適した気象条件であったこと、さらに、抵抗性が“やや強”の品種である「きたほなみ」でも発病が認められたことが特徴的であった。「きたほなみ」の抵抗性が打破されたと一概には言えないものの、条件によっては多発する危険性があることから、赤さび病に対する抵抗性と関係なく、越冬後の本病の発生推移をよく観察することが重要である。止葉が抽出するまでに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出から穂ばらみ期にも薬剤散布を実施する。

(2) 秋まき小麦のなまぐさ黒穂病

北海道における小麦のなまぐさ黒穂病の発生は古くから報告があるが、戦後は発生記録がほとんどなく、発生が認められた場合でもごく一部の事例に限られていた。しかし、平成 25 年は複数の地域で発生が確認され、その中には激発事例も認められており、今後の発生動向に注意が必要である。病穂は生臭い悪臭を放つので、本病が発生すると減収のみならず、異臭による品質低下を招く。さらに、汚染された生産物が乾燥・調整施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり被害は大きくなる。対策として最も重要なことは、健全種子の生産と使用である。病原菌がすき込まれた発生ほ場では土壌伝染も生じることから、連作を避け長期輪作を励行する。また、地域ごとの種適期を守ることが重要である。

(3) 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が麦類の茎内部へ侵入し、食害する。そのため、生育初期に加害された場合には、幼虫の侵入部位から上部の茎葉が枯死して無効分げつが増加する。また、出穂前に加害された場合には、出穂不能となったり、出穂しても傷穂あるいは白穂となる症状が現れる。特に、春まき小麦は本種による被害を受けやすく、多発した場合、収量が半減する事例も認められる。本種は年 2～3 回発生し、秋季には成虫が秋まき小麦等へ移動し、幼虫態で越冬する。平成 25 年は春季の天候不順により、春まき小麦のは種期が遅れたことから生育も遅れ、被害を受けやすくなっていったと考えられる。防除対策として、春まき小麦の春まき栽培は早期は種に努め、5 月下旬以降、6 葉期頃まで茎葉散布を実施する。

(4) たまねぎおよびねぎのネギハモグリバエ

平成 25 年、空知、石狩、上川地方のたまねぎおよび上川、オホーツク地方のねぎで、ネギハモグリバエの被害が多発した。本種はたまねぎやねぎ、にらなどネギ属のみを加害する狭食性の害虫で、これまで北海道で大きな被害になることはなかった。成虫は葉に縦に数個並んだ白い点状の食痕を残し、その一部に産卵をする。卵は 3～8 日程

度でふ化し、幼虫は白い線状の食跡をつけ、内側から葉を食害する。老熟幼虫は葉に穴を空け脱出し、表面付近の土中で蛹化する。葉身への加害が激しかった地域では、たまねぎ鱗片にも幼虫が侵入して収穫物の品質が低下する被害も生じた。本種は多くの薬剤に対し感受性が低いことが知られており、さらに、幼虫は葉に潜って内側から加害するため薬剤による防除効果が得られにくい。したがって、薬剤防除にあたっては、ほ場をよく観察し、葉に白い線状の幼虫食痕が増加する前に、縦に並んだ白い点状の成虫食痕が目立つようになったら、早めの防除を心がける。

(5) 各種作物のヨトウガ

平成 25 年、てんさいにおけるヨトウガの発生量は、第 1 回および第 2 回ともに平年よりやや多かった。また、本種の多発がてんさいのみならず、通常は被害となりにくい作物でも目立った。上川地方のそばほ場では、幼虫が 8 月下旬に多発し、葉および花を食いつくし、その後、周辺のほ場へ移動し、かぼちゃの果皮およびスイートコーンの雌穂を食害した。被害に気づいたのは幼虫が老齢に達してからであり、殺虫剤散布を実施したものの十分な効果が得られなかった。その他の地域において、にんじん、スイートコーンおよびデントコーンでも同様の被害が認められた。このように、本種は主要な加害作物でなくとも、幼虫が多発し、大きな被害を受けることがあるため、通常はヨトウガを対象とした防除を実施しない畑作物および野菜類においても、定期的にはほ場観察を行い、発生を早期に把握する必要がある。幼虫に対する殺虫剤の防除効果は若齢幼虫で高く、成育するに従って低下するので、防除適期を逸しないよう注意する必要がある。

4. 平成 25 年度に新たに発生した病害虫

平成 25 年度に北海道内において新たに確認された病害虫は、病害 12 件、虫害 13 件である。特に、イネドロオイムシにおいてイミダクロプリド剤抵抗性個体群の出現が確認されたので、薬剤の選択に当たって注意が必要である。